

機関番号： 11302

研究種目： 研究活動スタート支援

研究期間： 2009～2010

課題番号： 21820002

研究課題名（和文） 外国語教育における学習と評価の有機的統合

研究課題名（英文） Learning and Assessment in Foreign Language Education

研究代表者

鈴木 渉 (SUZUKI WATARU)

宮城教育大学・教育学部・講師

研究者番号： 60549640

研究成果の概要（和文）：

外国語教育では、「評価が学習を測定するためのツール」であることはよく知られているものの、「評価が学習を促進する手段である」ことは知られていない。本研究では、後者に注目し、小学校 5,6 年生 62 人を対象に、外国語活動における自己評価のプロセスについて検証を試みた。小学生に外国語活動後に記入してもらった自己評価の内容を分析したところ、英語の「音声や基本的な表現」への慣れ親しみだけでなく、「興味・関心」や「態度」が形成されていることが分かった。本研究の結果は、コミュニケーション能力の素地を育成する外国語活動の有効性を示していると言える。

研究成果の概要（英文）：

In second/foreign language education, assessment is usually a tool to evaluate learning, not a means to promote learning. In this study, I examined processes and products of self-assessment conducted by 62 Japanese elementary school children of Foreign Language Activities. Students' self-assessments were analyzed for five different foci: words, grammar, pronunciation, interests, and attitudes. Results indicate that elementary school children externalize their own learning and development via self-assessment. Pedagogical implications include that teachers may wish to encourage students to reflect, in diaries, journals, and portfolios, on what they have encountered during classroom activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,020,000	306,000	1,326,000
2010 年度	880,000	264,000	1,144,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野： 人文学  
科研費の分科・細目： 言語学・外国語教育  
キーワード： 学習、評価、第二言語習得

## 1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究では、評価が、「学習者の第二言語知識を測定するツール」であることは良く知られており、どのような評価法が学習者の言語知識（正確さ、流暢さ、複雑さなど）を正しく測定できるのかということが徐々に分かりつつある（Ellis & Barkhuizen, 2005, *Analyzing Learner Language*, Oxford University Press）。

その一方、評価が「学習者の第二言語知識を促進する手段」であることは、あまり知られていない。しかし、近年、教師がインタビューを通して学習者の知識を評価する中で、学習者の知識が向上したという報告（Poehner, 2007, *The Modern Language Journal*, 91, 323-340）や、テストを継続的に行うことが、学習を継続的に行うより、語彙知識の定着に効果的であるという報告もなされるようになった（Karpicke & Roediger, 2008, *Science*, 319, 966-968）。

評価を行うことが学んだ内容の定着を促進するということになれば、英語の教授学習場面における自己評価の活用を促すことにつながるであろう。また、評価が学習を促進するのであれば、研究におけるテストの中立的な役割（テストは学習を促進しない）を再考する必要もある。

## 2. 研究の目的

上記のような流れを受けて、本研究は以下の2点を検証することを目的とした。

- ① 自己評価が第二言語学習を促進させるのか。
- ② 自己評価を通して外国語学習の学びが

形成されるプロセスとはどのようなものなのか。

## 3. 研究の方法

### ① 協力者

本研究には、仙台市立某小学校の5年生35名（男子19名、女子16名）と6年生27名（男子16名、女子11名）が参加した。また、当該学校の外国語活動を担当している1名の教諭にも研究の趣旨を説明し、協力していただいた。

### ② 実験方法

まず、協力者に普段通りの外国語活動の授業を受けてもらい、終了後に自己評価シートを配布した。自己評価シートは記述式になっており、日本と外国の違いの発見、自分が頑張ったこと、友だちのよかったこと、英語と日本語についての発見など、気づいたことを書かせるというものである。

### ③ 分析方法

自己評価の自由記述を、(1) 文法に関するもの、(2) 語彙に関するもの、(3) 音声に関するもの、(4) 意欲・関心・態度に関するもの、(5) その他、に分類した。

具体的には、文法に関するものとして、「」が挙げられる。語彙に関するものは「小文字・大文字に分かれている」「NとMを間違えないように」「身の回りにはいろいろなアルファベットがある」などである。音声に関するものは「NとMの発音が似ている」「ABCも日本と外国では言い方が違う」「自分たちが言っている言葉と発音がすごく違う」などである。意欲・関心・態度に

関するものは「今日は数字も入ってきて難しそうだったが、簡単でおもしろかった」「アルファベット探しが楽しかったです」「キーワードゲームでは負けましたが、楽しかったです」などである。

本分類法は、代表者が日本人大学生の自己評価活動のデータを分析する際に用いた方法 (Suzuki, in press, *Language Learning*; Suzuki & Itagaki, 2007, *Language Awareness*; Suzuki & Itagaki, 2009, *System*) を、小学生の児童の自己評価に当てはめたものである。

まず、本研究代表者と英語教育を研究する大学院生 (修士課程) の 2 名が、データの 30% を分析した。次に、2 名の間で、データ分析に 90% 以上の信頼性が見られたので、大学院生に残りの 70% を分析させた。

#### 4. 研究成果

研究課題 2 「自己評価を通して外国語学習の学びが形成されるプロセスとはどのようなものなのか。」に関しては、英語の「音声」への慣れ親しみと、「興味・関心・態度」の情意面が形成されていることが示された。一方、語彙に関する振り替えりも予想した以上に少ない結果となった。文法に関しては、ほとんど見られなかった。これは、日本人大学生の英語学習における自己評価活動に見られるプロセスとは異なる結果となった。大学生の場合、習熟度やタスクによっても異なるが、一般的に、語彙や文法に関する気づくが多く、情意面などのプロセスに言及されないことが多い。この差は、小学校外国語活動の目標と中高大の英語教育の目標が異なるということも理由にあらうが、今後詳細な分析が必要である。

研究課題 1 「自己評価が第二言語学習を促進させるのか。」に関しては、児童英検な

どの客観テストを行えず、振り返り活動のみを分析することになった。言語学習の前提は、言語項目 (語彙や文法など) 気づくことであり、振り返り活動に現れる言語的なコメントは、「気づき」の結果であり、それらを分析することにも意義があると考え

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① Suzuki, W. (in press). Written languaging, direct correction, and second language writing. *Language Learning*, 62. 査読有り
- ② Suzuki, W. (2011). Written languaging, grammar exercise, and second language proficiency. *Papers of Foreign Language Studies at Miyagi University of Education*, 7, 47-65. 査読無し
- ③ 加藤真理・五十嵐淑子・Adrian Leis・鈴木渉 (2011) 「小学校外国語活動を通じた大学と小学校の連携」『宮城教育大学国際理解教育研究センター年報』第 6 号, 15-33. 査読無し
- ④ 板垣信哉・鈴木渉 (2011) . 「英語コミュニケーション能力の「素地」と「基礎」－第二言語習得の熟達化理論に基づいて－」『小学校英語教育学会紀要』第 11 号, 19-24. 査読有り
- ⑤ 五十嵐淑子・加藤真理・鈴木渉 (2010) 「小学校外国語活動を通じた大学と小学校の連携－学生ボランティアを活用した取り組みを中心に－」『宮城教育大学国際理解教育研究センター年報』第 5

号, 16-32 頁. 査読無し

- ⑥ 板垣信哉・鈴木渉 (2010) 「小学校英語活動の目標ーコミュニケーション能力の「素地」と「基礎」ー」『宮城教育大学国際理解教育研究センター年報』第5号, 33-36. 査読無し

[学会発表] (計4件)

- ① 鈴木渉 (2011). 筆記ランゲージング活動は第二言語学習を促進するか? 第36回全国英語教育学会山形大会 2011年8月
- ② Suzuki, W., (2011). *Languaging by Japanese primary school students of English*. American Association of Applied Linguistics, Chicago, USA, 2011年3月
- ③ Suzuki, W. (2011). Languaging and second language writing. Paper presented at Seminar in Second Language Writing. Tokyo International University, Saitama, Japan. 2010年11月
- ④ 板垣信哉、鈴木渉 (2010). 英語コミュニケーション能力の「素地」と「基礎」ー第二言語能力の熟達化理論に基づいてー、小学校英語教育学会北海道大会、札幌、2010年7月

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鈴木 渉 (Suzuki Wataru)

宮城教育大学・教育学部・講師

研究者番号: 60549640

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: